

政治家に扇動された「台湾有事」

張鈞凱（ストームメディア / チーフライター兼ディレクター）

「風伝媒」2025 年 5 月 26 日

<https://www.storm.mg/article/11040981#page2>

賴總統の就任 1 周年の演説では兩岸問題についての言及はなかったが、2 つの日本のメディアのインタビューでは「中国の野心」と「台湾有事」が大々的に語られた。台湾と日本の共同で「抗中（中国に対抗）」しようという雰囲気づくりの意図が明らかだ。5 月 21 日、日本の反戦団体「アジア・アフリカ・ラテンアメリカ連帯委員会」（Asia Africa Latin America Solidarity Committee, 略称 AALA）が台北を訪問、私も招かれて彼らとの座談会に参加した。ベトナム戦争反対から今日まで、さまざまな職業にまたがる日本の平和反戦のメンバーは、兩岸の最前線でいわゆる「台湾有事」の雰囲気を感じ取ろうということで、まず金門島とアモイに行き、その後台湾本島に来て兩岸の事情に対する理解を深めた。

AALA の吉田萬三代表理事は座談会で、日本国内では「台湾有事」についての議論は日増しに熱くなっていて、日本政府はミサイル防御を理由に南西諸島で軍事施設の強化を図っていると指摘、しかし日本の大多数の国民は台湾をよく知っているわけではなく、台湾の状況をはっきり理解しているわけでもないと言率直に話した。だから彼らは実際に台湾に来て「台湾有事」がいかに政治的に扇動されたものであるかを感じ取り、台湾社会の平和的な考えに対してより深く知りたいと考えたとのことだ。

私が興味深く感じたのは、彼らの金門島とアモイでの視察での印象だ。日本のみなさんは、現地ではまったく戦争の感じはなかったと熱く語った。座談会の後、AALA のメンバーの一人は彼が読んでいた『「台湾有事」を起こさせないために』というパンフレットを私にくれた。タイトルだけでも政府やメディアの風向きとは全然違う願いが感じられる。

別の一人は日本に戻ったあとも連絡をくれているが、櫻井翔が頼清徳をインタビューした番組を見た感想を送ってくれた。櫻井翔は台湾で緊張した雰囲気を感じたと言っているが、自分たちは台湾でそんな感じは受けなかったと彼は言う。「ものごとの印象は、誰と話したかで大きく異なるものですね」と。

以前中国大陆で駐在員として仕事をしていた彼は、中国人はとてもフレンドリーで率直で个性的で、お互い友だちになれる、「だから私はぜんぜん中国を脅威だとは思わない」とも書いてきた。今回台湾で多くの交流をして「台湾有事」は日本政府が軍拡のための口実として出してきたものだと確信したと彼は強調する。日本のメディアも偏っている、「私たちは日本のメディアの言い方を信用していない」とも。

櫻井翔のインタビューについて、彼は細かいところに気がついた。頼總統は「中国が台湾を飲み込むとしたらそれは最初の一步であり、中国の最終目的はルールに基づく国際秩序を変えようということだ、だから中国の脅威は国際問題であり、アメリカと日本などの民主陣営に中国が戦争を発動するのを共同で阻止してもらいたい」と述べたあと、最後に一言「予防は治療より重要だ」と言った。AALAの彼はこの頼總統の「予防」というのは対話と交流のことだろうか、「治療」は戦後処理、復旧、復興のことだろうか、ちょっと前後の話が合わない気がすると言う。もし戦争が勃発してしまったら、治療など並大抵ではないのだからと。

冷静に見れば、今この世界は戦争が始まっている。その背後にはいずれもあの世界のビッグブラザーの影が見える。しかし欧州ではスペインやオランダ、アジアでは日本やベトナム、香港などで平和反戦の声があげられている。一方で台湾と中国の間の導火線に火が付くのを待つ人も多い。過激主義に火をつけてはいけない。「戦争、ほんとにいいの？」凶暴な空気が満ち溢れる今だからこそ、私たちは心に問いかけないといけない。

【翻訳 鈴木啓史】